

性のものでもなく、念力というような力んだものでもなく、また、禅機というような抹香くさいものでもない。富岡鉄斎八十五歳の書に「忘機得真趣」（機を忘れ真趣を得）というのがありますが、遊記山人の境地はまことにそんなものであるか。

こういう心境は、儒書や仏書や聖書にも書いてはあるが、その境地には絢爛豪華な花はなく、野の百合の一輪のような素朴なものであるから、人の目にとまりにくいのである。いつか、宮田さんの家の応接間で蒲作英の書になる次の言葉を見たことがある。

道德五千言、牛に乗って函谷を出ず。腰に十萬貫を纏い、鶴に騎って楊州へ上る。

これは五千言の「道德経」を遺して、老子は牛に乗って函谷関を出て、漂として行方を消した。そうかと思うと、腰に十萬貫の錢をつけて、しかも仙人になり、鶴に騎って、名都・楊州へ行きたい、などという欲の皮のつつ張ったやつがいる、という対句である。こんなふうにも云いあらわさないと仙境は表現にくい。衆生を救護して畏怖の心を無くさせる観世音菩薩の功德を「施無畏」というが、怖れのない境地を人間に与えようという企てにおいては老荘も同じである。

印度から中国に渡来した仏教は、それ以前からの儒教と道教に挟まれて、仏陀のカッサンドのような形で熟成された。仏の一方の面は儒と交わり、他方は道に馴染んでいる。この

ような三位一体のものが東洋文明を貫いている。白楽天や寒山の詩、顔魯公や蘇東坡の書文、十八史略や菜根譚の文章、また、下って近代の呉昌碩、齊白石、王一亭の画にもその風格が見られる。というよりは、その真髓を再現するために詩文があり、書画の存在がある、という方が東洋文化を云いあらわすのに似合っていると思う。

私の畏友に、峽南翁・間四郎氏がいる。私は間さんを宮田さんの観音会に誘い、間さんは私を、諸橋轍次（止軒）先生の止軒会に誘ってくれた。この会は止軒先生が中国の詩文を講義される会である。私はこの会の席後、二つの亥の詩の、めぐりあいを先生に話すと、先生は「それは面白いことでした。亥にまつわる古い故事が左伝襄公三十年にありますから、李義山のその詩はその故事にのっとったものでしょう」と云われ、左伝の故事について詳しい話をされた。左伝の話を諸橋先生の著「十二支物語」から抜萃すると、『春秋時代、晋の悼夫人は杞という土地に城を築きました。むかしの土功（土木工事）はだいたい民間のただの労役であって日給は出ません。その代わりに年齢はだいたい六十五までのことにして、それ以上のものは、老者をいたわる意味からも、使役しないことになっていました。さて悼夫人が杞に城を築いて、その慰勞に人夫たちに酒食の饗応をした時、その人夫の中に、絳県の男だという、どう見ても七十以上に見える老人がいました。そこで役人が怪しんで「キサマは一体

何歳か」ときくと、その老人の答えは、「何分にも私は小臣もので、自分ながらいくつになつたのかよく知りません。ただ生まれたのが正月甲子の朔、それから今日までに甲子を四百四十五回むかえました。いやその最後の甲子までにはあと三分の二残っています」というものでした。それだけでは誰に聞いても計算がむづかしくてわかりませんので、そこで晋の賢者・師曠のところへ行って、その話をすると、師曠は、アアそれは魯の叔仲・恵伯が晋の卻成子と承匡の地で会合した年に生まれたことになるから、彼は今年七十三歳になるはずだ、といいました。最後の甲子を加えると七十四歳、そしてその最後の甲子はまだ三分の二、即ち四十日を余しているというから計算すると、 $60 \times 445 - (60 \div 3 \times 2) = 2666$ となります。

ところが、この話を聞いた或る賢い大夫が、ハテその日数からすると、その男の名は「亥」というのかも知れない。亥という字は二首六身からできていて、篆文では𠂔となつている。即ち首は二であるから二首、下はイが二つとLが一つ、Lは二画に数えられるから六身となる。そして商人などが使う数字の符号から考えると、二首六身は二六六六である。また昔はすべて旬（10）を単位としていたから、結局 26660 という数になって、亥を意味しているのだらう、という新説を出したのです。この話が晋の一大勢家・趙孟の耳にはいつて、趙孟がさっそく降県の大夫を召して調べさせたところ、

この役夫は唐亥という賢人でした。そこで趙孟は、「あなたのような賢人をこんな賤役につかせておいたのは、私の不明の罪です。これからは改めて御意見に従いますから、どうかあなたも仕途について下さい」と懇願しましたが、亥は「老人になり過ぎたから」といって、固辞してききいれませんでした。趙孟は唐亥に改めて土地を与え、絳県の師としました。賢人を擢拔したこの話を魯の権臣の季武子が聞き、晋の朝廷には君子が多い、「未だ媿んず可らず」と、軽蔑はできないといって、畏れたということです。以上これは「左伝」に出ている話です。

「孟子」の中に、晋の平公が唐亥という賢人に師事した話が出ています。この唐亥が平公に向って、入れ、といえば平公は入り、坐せ、といえば平公は坐し、食え、といえば、どんな蔬食菜羹でも平公は甘んじて食ったというのです。その亥唐は「韓非子」では唐亥となつていますから、おそらく「左伝」の唐亥と「孟子」の亥唐は、同一人なのでしょう」と。

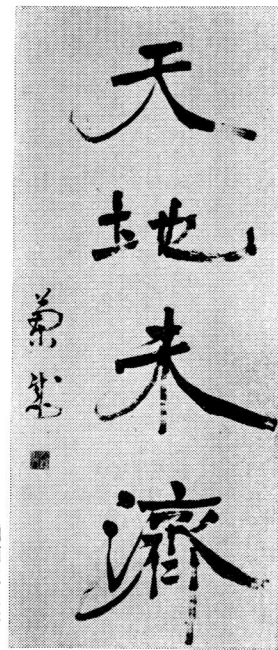
このように「左伝」に重要な足跡を残した当該の唐亥は「韓非子」には同じ名前が出てくるが、これは「孟子」の亥唐に該当し、それはみな同一人であろうというのが諸橋先生の説である。

さて、普通人は暦年をもって年齢を数えるのであるが、そうすると、太陽暦でも太陰暦でも間というものがあって、それぞれの該当年月に応じて正確を期し難いが、甲子（十干と

十二支の最小公倍数六〇日)を単位として、これを積み重ねて計算していれば、甚だ正確である。春秋時代の賢人・唐亥も晩唐の老吏・王全も共に甲子をもって年齢を計っている。幕末の仙学・佐藤一斎も、自ら算すという言葉の通り、おそらくこの詩を作ったときの七十三歳という年齢は、生まれてから四百四十五甲子の計算を心得ていて、それからはいき出したものであろう。これから見ると、中国の年齢計算は昔から、満計算に依っていることがわかる。

春秋時代と晩唐とは千三百年もの隔りがあるのだが、よくも同じ絳県に、同じような人物があらわれたものである。晩唐から下ること千年の江戸末期にまたも同じような生き方を考えた人間が日本にあらわれ、通算二千三百年の長きにわたって、亥が人間の心の中に住み続けて来たことを面白く思う。私はこの文明の脈の連綿を貴重に思うと同時に、長い間の治乱と興亡の渦巻の中から、角のとれた丸い柔軟体を探し出し、いかなる栄枯にも盛衰にもかかわりなく平気で生きて行ける姿勢をあみ出した人間の叡知を尊く思う。この生き方について莊子は云う。

「善を為すとも名に近づく(有名になる)こと無かれ、悪を為すとも刑に近づく(刑罰にふれる)こと無かれ。督(筋道を通すこと)に縁りて以て経(常のおこない)と為せば、以て身を保つべく、以て生を全うすべく、以て親を養うべく、以て年を尽すべし」(養生主)と。



胡蘭成氏書

て存在した。これを胡蘭成氏はその建国新書において、「天地開闢の優しい柔らかさ、いたづらの喜び」と云い、日本の「神ながらの道」を称える。

こういうものについて、保田与重郎氏は、「公の文化が土俗とふれているところに生れた文化、即ち文化と民衆の関係は、龐大な既刊資料を埋蔵したままで、殆んど顧みられぬ傾がある。この所謂俗学の雑学的部面から、必ず古の下河辺長流や契沖の如き大学者が現れるだろうということを、私はつねに思っているのである」(騒友)と云っている。

この土俗と文化との触れあいを掘り起す仕事は文学、芸術、宗教、学問などに課せられている。この使命を自覚しない文学を駄文といい、土俗の真の姿を見つめない芸術を虚芸、土俗の浄土に根をおかない宗教を邪宗、土俗の悦びに触れない学問を闇学という。さて、更に、この土俗の息吹きにふれない文化はニセ物であり、土俗の営みに背を向けた企業は

四代將軍徳川家綱が多摩川から江戸の町に玉川上水を引いた。(拙稿庖丁余語第八号・玉川上水物語)。この水系に属して、その恩恵に浴していた人達はおもに諸国から移住した武家階級で、その人々の中にあった文化をここで、かりに多摩川系文化と称ぶことにしよう。江戸には、あまりこの水道の恩恵を蒙らずに井戸水で生きていた下町の大衆がいた。この人たちの中にあった文化を、かりに隅田川系文化と称ぶ。きわめて大ざっぱに分けると、江戸文化は如上の二つに分けることができる。この多摩川系と隅田川系では人の氣質が異なり、従って生き方も変っている。前者においては「処世」という、おもに学問の定型に従って、計算の見通しのつく生き方が重んじられ、この人たちは立身榮達を主眼とした。これに反して後者においては、儒仏道が混沌として入りみだれていて、その中から「渡世」という生き方が生まれた。この渡世は義氣、俠氣および人情につながって、江戸の文化として芝居などで華々しく開花したが、その花陰には天衣無縫の道氣の化をうけた幽花も存在した。この幽な花は洒落や道化に一花咲かせたこともあったが、その本体は、「よく見ればなづな花咲く垣根かな」(芭蕉)の雑草の花であって、それは、春風も夏天も秋霜も冬雪も我れ閑せず、色もなく声もなく、香りもなく、味もなく、しかも驕ることなく悄えることなく、悼々とした一種の戲氣をもって、人間の歴史の続くかぎりにおいて、この地上に生き永え得る野の草の命とし

虚業、土俗の思索を無視した教育は異端、土俗の生息を蔑視した政治は専横であり、そして、これを軽視した軍事外交はすべて敗北におわる。なぜならば、土俗こそ「天地不仁」を身をもって験め、「天地未済」をつねに得心している唯一不変のものである故に。

この点について、深い関心を示した学者には、保田氏の指摘したように、江戸初期において下河辺長流と契沖がいる。近來には折口信夫、柳田国男、柳宗悦がいる。文学者には吉田兼好と松尾芭蕉、そして江戸の一連の造文家の面々。画家としては葛飾北斎と江戸の風俗画家たちを推すことができる。教育家としては佐藤一斎、政治家としては徳川光圀、徳川吉宗、二宮尊徳、西郷隆盛、および最も重要な存在として、明治天皇を挙げることができよう。

「土俗もの言わず」この物いわざる幽花を発見した喜びを、故吉川英治氏は、
「小隠は山野にかくれ、大隠は市に住む、というが、たしかに市のなかにも、幽寂はあるものだ。いや古いことばにも

林泉、市ニ近ウシテ、幽サラニ幽

なんて洒落たことばがあるのを引いて、北京の茶館の联に懸けてあるのを見たことがある。中華の都会人は、早くからこういう境地を見出して、べつな天地を楽しむ工夫を知っていた。

丸の内何号街というビル街の、地下室で道路面からわずか

にさす明りで、他念なく、篆刻に耽っている騒音裡の静人の姿をふと見たことがある。ドアが開いて、たれかと思ったら、山水楼主人の宮田氏であった」（随筆集・折々の記）と書いている。

これに較べて土俗の風尚を解さない傾向は、日本には甚だつよい。森槐南（一八六三—一九一）はその著「李義山詩講義」の「王全亥字詩」のくだりに、「この絳県には、春秋時代に於て、此の王全と同じように、長寿をして、謎語を以てその年数を言ひ頼わした奇談があります。それは左伝の襄公三十年の条に見えている彼の絳県の人の物語りであります。稷山が既に古への絳県でありますれば、此の左伝の事実は、恰も今日の王全の為に設けられたる典故ではあるまいかと疑わする程、都合の宜しい話でありますから、それを引き来りましたのが、即ち此の詩の趣向であります」と述べている。

この左伝の人物・唐亥は一介の築城人夫であったが、晋国の卿・趙孟の見出すところとなり、趙孟はこれに厚遇を与え、敵国・魯をして、うすんずべからずと、警戒心を起させたことは既記の通りである。この人夫の唐亥と駅吏の王全が甲子を以て年齢を云いあらわしたことを「謎語（人を迷わす言葉）」といい、この話を「奇談（おかしな話）」と片づけたのは奇態なことである。それがおかしな話ならば、佐藤一斎もおかしな人物ということになる。

このへんに潜んでいる重要な「道氣」というものに合点が

来る。つれの課員が二人で、「六国飯店まで多少錢？」と聞きまわっていると、ゴムタイヤもついていないボロ車の老車夫が、普通の値段の倍額のことを云う。聞いた課員が馬鹿にした口調で、「お前は老人で、車もボロのくせに、なぜ高いんだ」というと、老車夫曰く、「車がボロで俺が老頭児だから力が要って息がきれる。だから高いんだ」という。そういう価格形成は経済学の本には書いてはないし、まして、日本軍占領下の逼迫した経済社会には在るはずがない。こういう桃源価格ともいうべきものに、始めて出合った私は驚ろきもしたし、感心もし、その車に乗った。老車夫は先頭にたち、走るかと思うと、さにあらず、漫々と歩いて行く。課員をのせた若い屈強な車夫のピカピカな立派な車が二台、あとからノソノソとついて来る。老車夫は手鼻かみかみ、私の抱えている内蒙宣化の遅咲きの杏の花について話しかけてくる。私は六国飯店の入り口で、花の束を二つに分けて、その一つを老車夫にやった。若い車夫たちも嬉しそうで、手を振りながら別れて行った。

現今の日本は、頭のいい伊藤博文や森槐南が敷設した欧米型のレールの上を、群衆の放埒を満載した超特急が走っている仕末である。「おめえさん、どこまで行きなさる？」、「はいダイヤモンド駅まで」。乗客の行き先は、明治末から今日まで変っていない。そこで車掌は叫ぶ、「みなさま、たいへんお疲れさまでした。次は終着駅／＼ダイヤモンド／＼でござい

いかないまま、森槐南は明治の有力な漢詩人として、東京帝国大学において教鞭を執り、「ああ玉杯に花うけて」の高踏思潮に拍車をかけ、多くの秀才を育成した。森槐南は中年になって伊藤博文に聘せられ官途につき、主として明治政府の大陸政策に寄与した。伊藤博文は、「朝鮮人の白衣を爰えるのには、百年はかかるだろう」と、妄語しつつ日韓合併を推進した。森槐南博士は、不幸、伊藤公と共にハルビンで韓人の兇弾を受け、再起不能となった人である。伊藤公も森博士もそうして消えたが、この土俗軽視の思想は、明治末期から大正にかけて、日本を支配し、日本は秀才官僚国家の姿となり、それが昭和に引きつがれて現代に及んでいる。人はこの官僚組織にだけ目をつけ、非難を浴びせるのだが、実は、その組織の中の秀才的処世が土俗の渡世とつながりを持たず、いたづらに高踏独善に傾いたところに弊害を生じたのである。それは明治以来の、情緒に欠けた頭脳偏重教育に欠陥があり、大陸で幅をきかせた日本の軍人の独善もそれと同じものであった。日本の満洲駐屯軍のある高級将校は、「你（軍が雇っているボーイの俗称）は臭いから、ドアから中に入れぬよう」にと当番兵に命じた。この高踏独善が今日、民主主義を謳歌する自由日本に消えているであらうか。

昭和十九年の頃、私は内蒙の竜烟鉄鉞という国策会社の一課長の職にあった。或る日、所用で北京に出て、駅に下りると、駅前に並ぶ五十台位の洋車が、梶棒をあげて客に迫って

ます。どなたさまも、ルビー、サファイヤ、エメラルドなどお手廻り品をお忘れなきよう。なお、白金線にお乗り替えのお客さまは三番ホーム、黄金線のお客様は八番ホームへ。次は終着、ダイヤモンドノ」と。

さて、このダイヤモンド幹線のガードの下のささやかな軒を借りて、学んで時に習う悦びをつつましやかに分ちあっているのが前記の止軒会で、講筵延々二十年に垂んとしている。今では、先生が卒寿、弟子の平均年齢は亥寿を超えていよう。以前から入会資格が還暦以上とされていた会に、当時、五十歳を出たばかりの私が入会を許されたのだったから、全く破格のお許しであった。青二才の私は久しい間、身をちぢめて聴講に及んだ次第だった。その会に今から四五年前、どう見ても三十半ばの年輩で、「キサマは一体何歳か」とききたいような青年が入会した。銀座壱番館画廊主の海上雅臣氏であった。それ以後、私は古参の気分にかわり、ゆとりのある態度になって、海上氏とも親しくつき合うようになった。

私はこの会に、それより以前、胡蘭成さんを案内した。胡さんは諸橋先生の詩経の講義にききまはれて、この会に顔を出すのを楽しみにしていた。とき恰も、胡蘭成さんの日本文の著「心経随喜」が出て、それによって会員の人たちとも親交が深まって行った。海上さんは、さいきんに、その頃のことを回想して、次のように記している。

「昭和四十二年の秋、止軒会の席後に紹介されて心経随喜を

読みその内容に感動したばくは、これを数とり寄せて友人にすすめた。その礼として別に一冊その本の著者胡蘭成氏から、扉に微風感我心とするした本を贈られたとき、胡氏の清爽な筆法に一層感動し、あらためて胡氏の書を拝見したいと思った。(略)(遊記山人竜鱗歌集跋より)。

そういうわけで、海上氏の主唱で、四十三年の正月早々、竜番館画廊で「胡蘭成書展」が開かれることになり、諸橋先生から「胡さんの書を推す」という次の文が寄せられた。

『胡蘭成さんは近頃珍しい多才の人である。書を能くし詩を善くし、また学に深い。私が胡さんを知ったのは最近四五年のことであるが、初見の印象は所謂中国の大人、悠揚迫らざる風格の人であった。その後談論を聞き著書を読んで、はじめて奇才縦横炯眼達識の人たるに驚いた。書は其の人の如し胡さんの書には温雅のうちに警拔のキラメキがある。(略)』。

この胡蘭成書展開催中のある日、みんなが出かけてしまった会場に、私と家内と前に書いた三女とで留守番をしていると、一人の男の人がは入って来、書を丹念に見ている。カメラマンが、書を背景にその人をパチリパチリ撮っている。私はその人が誰かは知らないが、どこかで見た顔のように思えた。やがて海上さんが事務室から出て来て、親しそうに挨拶するので、「あの人は誰だい」と聞くと、「川端康成さんだ」というのである。それでは、家内娘もろとも川端さんと一緒に記念写真をとってもらいたい、と、その写真家にたの

むと、あいにくフィルムがきれてしまったと云うのである。残念なことだと思っていると、川端さんは身仕度をして、さっさと帰って行った。帰りがけに、来会者に配布していた拙文の「肉食談義」という一冊子をあげた。写真をとっていたのは海上さんと親しい柿沼さんという人で、気の毒に思ったのか、フィルムをわざわざ買って来て、娘の見合い写真をそこで撮ってくれた。その写真が実物よりよくできて、娘はその後結婚して、前に述べたような新婚旅行に出たのであった。

この書展は思いのほか盛会で、江湖の名士がつめかけ、一般の瞳目する効果をあげて幕を閉じた。会期中に私の店のお客さんたちにも声をかけて観賞してもらい、何点か買上げの榮に浴したのだったが、古いお客さんの一人、三島由紀夫さんだけには行き違いばかりで、つい誘う機会を失ってしまった。

その会が終わると海上さんが、次には、世話人の遊記山人の喜寿書展をやるうじやないか、と云い出した。前掲跋文のつづきに海上氏は、「これが遊記山人との出逢いのもととなった。このときはじめて山水楼をおとづれたばくは、所期の目的を得ると同時に、書についてよりすばらしい指針の人として山人と親しくする機会を得た。そうして面白いことは、翌春早々ばくが、亡命生活の無聊をお慰めしようとして開いた胡蘭成書展を見に来られた川端康成氏が、かえって遊記山人の書を推挽された。このいきさつは遊記山人喜寿書展の序にく

わしい。ばくはこの折の経緯を省ると、川端氏が慈航観音堂建立に際して寄せられた揮毫の、有由有縁の語の妙をしきりに思う。(略)。と述べている。

そういういきさつで、宮田さんの喜寿を祝って書展を開くという企てに対して、本人は、

ただ好きでやたら書きながすが文字を

人に示さんことのおろかさ
はらわたをさらけいだして恥かしや

心のしみの文字にのこるが

十年の歳月われに加はらば

心手相応の文字書き得んか

などの歌を詠んで、われわれを相手にしないのである。そこで、年来悲願の慈航観音堂建立の浄財を集める目的で、という、それならと、膝をのり出し、

なにはさて手習だけは残年の

わが一等の娛しみにして

肩胛は幸ひまめで馬鹿者の

駆使に甘んじ筆とり運ぶ

年輪の皺よせやにわが文字に

多少の皺はつかむとするか

という気分にかたむいて、ようやくやる気になるのであった。

この展覧会の相談のために、私が山水楼へ出向くと、宮田さんが一通の手紙を開いて見せるのである。それは川端康成

氏から故立野信之氏に当てたもので、その文の中に、「胡蘭成という人(汪政権の人で日本に亡命したのですから御存じと思ひます)の書の展観が近くの竜番館画廊でありましたので、ついでに寄って見ましたところ、展観の世話人の一人らしいトンカツ屋かつ吉の主人(?)の肉食談義という一冊子をもらいました。その題字は山水楼の宮田武義氏、巻尾にも宮武氏の書あり、まことに立派なので揮毫を頼みたくなりましたので、あなたからもお口添へお願いいたします。あなたも一幅書いておもらひになりてはいかがかと存じます」というくだりがある。



「肉食談義」の題字、遊記山人

その後の顛末については、「遊記山人喜寿書展」に川端氏が寄せた「宮田遊記氏の書」と題する次の文に詳しい。それは、『胡蘭成氏の書の展覧会を見てゐた時、連想としてか、私は宮田武義氏の書、その清高な風格と古雅な気韻の書がしきりと思はれた。宮田氏と親しい立野信之氏に、私はそのことを伝え、宮田氏の書を恵まれないものと言った。やが

て日本ペンクラブの小集会が山水楼にあつて行くと、早くも宮田氏から書をいただけるという幸ひが待っていた。私はその書の妙趣に改めておどろいたのは勿論だが、おどろきはなほ二つあった。合せて十六葉もたまわったこと、また、その多くに私の姓名の文字をふくむ中国の古い詩句が書かれてゐたことである。私は感動した。……(中略)……

私がいただいた書は「瘦硬はじめて神に通ず」とでもいう肉細の書体が多いが、骨はあつて硬くなく、温い滋味にうるおい、心と手がよく筆を転じて円滑ながら、達者の臭味はなく、まことに高爽の名筆である。また、宮田氏の大字には肉太の書体もあつて、それには潤筆と渴筆の映発、調和の妙が見られる。宮田氏は自分の店の山水楼に自分の書をかけることなど滅多にないが、たまたまペン・クラブの小集の時、「游神」の二字があつて、立野氏も私も感歎久しうし、ほしくてならなかつた。

私は宮田氏の書展を楽しみに待っている。というものであつた。

宮田さんは川端さんの、あのギョロツとした眼を評して、「長生久視」という。久視とは、ジツト見ることだという。私も宮田さんの書を見ること久しいが、一斎や蒼海や蘇峯と共に噛みしめると、少しわかるようになった。これを教えてくれたのは胡蘭成さんである。その余りのところは川端さんの書に教わつた。川端さんと宮田さんの出会い、げに、趙

文字のうちに這入らぬと知れ

の一喝は、警世の曉鐘のごとくわれわれに感じられるのであつた。

朝から老酒や葡萄酒を飲み放題の「遊記山人展」は、前の「胡蘭成展」とともに、今日の銀座の風景ではない。

盤餐の老夫、食を分ちて減じて溪魚に及ぶ。

の杜甫の風流が、銀座の市塵を暫し鎮静するの趣があつた。

樗木の命を保つわれなれば

白玉せよとはもったいなかり

と詠む宮田さんは、無用の材の樗木が、無用なるが故に伐られることなくよく老木になる、と自分に譬える。莊子はこの木について、「今、子、大樹ありて其の用なきを憂えなば、何ぞ之を無何有の郷(理想郷)広莫(広々とした)の野に樹えて、彷徨乎(ぶらぶら)として、その側に無為にし、逍遙乎(のんびり)として、その下に寝臥(ねころぶ)せざるや」(逍遙遊)と云っている。高山樗牛と坪内逍遙の見識において、広莫の野でない、土一升金一升の銀座のどまん中に樗木を樹え、その陰で胡琴などを聞こうという、海上氏の風流にも敬服した次第であつた。この会も盛会に終始し、はらわたをさらけだした書がたくさん売れて、観音堂建設にも目処がたち、工事は進んでいた。

私は一肩ぬけたような思いになり、月が明けた昭和四十三年六月にアメリカへの旅に立った。飛行機が羽田を離陸して

孟と唐亥、李義山と王全のめぐり合いにも比すべき、ほほえましさを感じられる。そういうことになる、斯く申す拙者はとりあえず杞城の城主か、絳台駅の改札掛ということになるうか。

さて、この会に展べられた宮田さんの書品は、巻きて舒べ去りては来たる雲水の

姿にわれは手習をする

大空に雲往く如く長江に

水去るごとく筆を運ばむ

の千里の景觀が人々の心を、更に一層の楼に上らしめ、

床の中夜ふけて独り目醒むれば

ものに逐はるる心せちなき

やがてわがむくろもおもひもすべてみな

鳥部の山の煙と消なむ

の人生の焦燥と諦観が、交々かすれとにじみの木霊となつて人々の耳をそばだて、

無能者と観念すれどなほわれは

文字書くことに執着おぼゆ

千本の筆を投げ捨て万枚の

紙をつぶしてなほ文字ならず

という執念と努力が人々に自分たちの揮のゆるみを気にさせ

た。そして、

うまいとかまたまづいとかいふかぎり

しばらくたつと、乗客のざわめきも静まり、やがて機内の客は白河夜船となつた。隣席の婦人と話を取り交わしていた妻も黙し、ひとり飛行機だけが生きていて、エンジンの微動が身に伝わる。窓外中天の月は十六夜であらうか。私は胡蘭成さんの新著「建国新書」を取り出して読む。

『三国志演義に、関羽は荊州の戦で負けて、呉に首をとられた。山寺の月夜に、関羽の魂は生前面識のある普静禅師の前に現れ、「わが首を還せ」と叫んだ。禅師一喝していふ、「貴殿に打ちとられた大将顔良や文醜の首はこれまた如何にして還すべきか」。関羽の魂は豁然悟って、稽首お礼を申し去つた。三島の「英霊の声」を読んで、ただただ三国志演義のこの一節の文章に新に感服した。三島の作には悟りがない」と。

三島文学の評は、まだ長く続くのであるが、はからずも太平洋上の月下でこの文に遇つた私は、何か、三島さんが不吉に襲われる感じがしてならなかった。私は平素の三島さんの風貌を想い出し、二・二六事件の事実上の首謀・栗原安秀中尉を連想するのだった。当時、歩兵一聯隊第七中隊に現役上等兵として在隊した私は、中隊長・山口一太郎大尉の下で、叛乱の企画に従事していて、栗原中尉に湯河原襲撃の弾薬を手渡したことがあつた。あの青年将校の人たちは、たしかに義侠に富んで人情に厚く、日本人の優れた一面を具えてはいたが、残念なことに、弁慶の道氣や大石良雄の戯氣に薄